

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団体名	特定非営利活動法人鳥の劇場	
施設名	鳥の劇場	
助成対象活動名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額（総額）	28,482	(千円)
	公演事業	20,669 (千円)
	人材養成事業	6,860 (千円)
	普及啓発事業	953 (千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
	『イワンのばか』	18年May	作・トルストイ 台本・永山智行 演出・中島諒人 出演 齊藤頼陽/ 中川玲奈/高橋等	目標値	1,380
		鳥の劇場		実績値	1,323
	『剣を鍛える話』	18年Sep	作・魯迅 台本・竹内好 演出・中 島諒人 出演・齊藤頼陽/中川玲奈 /高橋等	目標値	420
		鳥の劇場		実績値	267
	三島由紀夫「近代能楽 集」より『葵上』『班 女』『熊野』『綾の鼓』	19年Feb	作・三島由紀夫 演出・中島諒人 出演・齊藤頼陽/中川玲奈/高橋等 /阿部一徳	目標値	840
		鳥の劇場		実績値	1,050
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	
				実績値	

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
	小鳥の学校	2018年7月-2019年3月	講師 中島諒人、目黒大路、大岡淳、上田假奈代 他	目標値	参加者20 入場者360
		鳥の劇場		実績値	参加者27 入場者378
	高校演劇もっと盛り上げ 事業 つくる高校生	2018年7月-2019年3月	講師 目黒大路、大川潤子	目標値	380
		鳥の劇場		実績値	275
	若手演劇人の作品向上、 社会との関係づくり支援 事業	2018年5月と11、12月	講師 中島諒人	目標値	150
		鳥の劇場		実績値	116
	お年寄りのお年寄りによ るみんなのための演劇	2018年7月から9月	講師 齊藤頼陽	目標値	100
		鳥の劇場		実績値	52
	人材交流			目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	
				実績値	

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
	上演ともっと深く出会うための戯曲の講座		講師 中島諒人	目標値	45
		ギャラリー鳥たちのいえ		実績値	31
	劇場で働く人たちを知る	18年Aug	講師 齊藤頼陽 他	目標値	30
		鳥の劇場		実績値	9
	地域に演劇力お届け事業		講師 中川玲奈 齊藤頼陽 他	目標値	1,320
		アウトリーチ		実績値	321
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	
				実績値	

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

当劇場の強みは、10年以上の試行錯誤の活動により醸成された地域からの信頼・期待と、劇団（創作団体）との一体的運営の二点にまとめることができる。少子高齢化、人口や経済規模の縮小という日本の中での普遍的な課題に対して、上記二つの力を存分に活かしながら、2018年度も柔軟かつ機動的に各種事業に取り組むことができた。（エビデンス>資料1.pdf）

事業の組み立ては、<公演><人材育成><普及啓発>のどれにおいても、「深さ」と「広さ」のバランスを取ることを心がけた。演劇の可能性や魅力を深く追求すること、同時に世代や観劇経験の違いを超えて社会に広く興味を喚起すること。これらは劇場の命であり、劇場発展のための両輪である。18年5月の公演事業『イワンのばか』は、観客層の拡大を目指したものだったが、人という過去最大の動員となった。19年2月の三島由紀夫の短編4本連続上演は、現代演劇の可能性を深め拡大する挑戦で、こちらも人の動員で県外からの集客も多かった。

人材養成事業「小鳥の学校」は、演劇を通じての非認知的能力の養成という今日的目標の意義が、約10年の事業継続の中で県内に広く認識されるようになり、過去最高の参加希望者数となり、発表公演もたいへん盛会であった。劇場が人を育てる場であるという意識が、地域の中に少しずつ根を張ってきている。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

文化的な価値の創造、その社会的な共有や社会との関連づけ、経済的なアウトカムの創出などは、継続的な活動によってのみ育つ非常に時間のかかる営みである。一過性の経済効果や盛り上がりや商業的イベントによって作ることは可能であるが、劇場の活動が目指すべきは、本質的で深い人のつながりや他者理解など人間的価値の醸成であろう。（エビデンス>資料2.pdf）

各種事業の成功は、劇場活動の様々な意味が継続によって生まれ、それが発展していることの何よりの証左である。

秋の学習発表会シーズンにおける学校現場からの指導依頼の増加（地域に演劇力お届け事業）や、三島戯曲公演時に初めて試みた劇場近くのホテルとの宿泊プランの実績などは、継続によって生まれる活動意義の顕著な例である。

また、『イワンのばか』公演時に、物語世界とつなぎながら、地域の食材や野草について学んだり、おいしく食べるという企画も併催した。近隣の農業生産者、いのしし猟師の方々や鳥取県立博物館の学芸員の方にも来ていただき、知的にも楽しく、地域特産の食の体験にもなり、売り上げにもつながる新しい事業モデルとなった。

劇場近くの県道に当劇場を示す道路標識が設置された。劇場裏にバス停が設置され「鳥の劇場」というバス停名となっている。地域への定着を示すわかりやすい例である。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

・□公演事業

上演の質については、観客による評価・専門家による評価ともに、非常に高いものであった。観客動員の点でも、三公演で合計2552人で、2017年度の1882人(三公演)と比しても順調な伸びを見せている。(エビデンス>「イワンのばか」観客の声.docx/三島「葵上」観客の声.docx/三島「班女」観客の声.docx)

『イワンのばか』公演での家族づれでの来場は、予約時に明確に分かっただけでも、99家族の来場であった。アフタートークの参加率をあげることも目標とした。20パーセントの目標に対して、31パーセントであった。

・□人材育成

プロの若手演劇人の育成と子どもからお年寄りまでの一般市民を対象とした演劇の楽しみの普及とコミュニケーション能力等の育成を目標とした。

若手演劇人に対しては、自分のスキルの社会的可能性に気づき、一層の向上へのモチベーションを持ってもらうことができた。都市の若い観客を主な対象に演劇活動をする人が多い彼らに対して、貴重な学びの機会を提供することができた。

一般市民を対象にした事業は、小中学生、高校生対象のものは、前年度以前からの継続で、演劇を通じてのコミュニケーションスキルや人間的成長を目指して実施。ともに発表公演を行い、非常に充実した公演となり観客にも好評だった。

18年度はお年寄りを対象にした事業も初めて実施。新聞での告知などにより、興味のあるお年寄りが名集まった。初実施であるため、方法は手探りだったが、9月の鳥の演劇祭の中でリーディング公演を行い、参加者がいききと盛り上がるのと同時に、観客に新しい演劇の喜びを届けることができた。

・□普及啓発事業

演劇に興味のある人を対象に戯曲をともし読み、解釈してみる座学の講座、夏休みの小学生を対象とした劇場の仕事体験、アウトリーチ活動として学校等に出かけて小さい上演やお芝居づくりを手伝うなどの事業を実施した。

演劇の専門家集団が、地域の公的な資源として、新しい喜びや楽しみを提供するとともに、地域発展のための学びの機会を提供するという目標を、広範囲にしっかりと果たすことができた。人材育成を通じてのコミュニティへの貢献は、劇場が示しうる最もわかりやすい貢献であり、その機会の拡大と質の向上は、常に重要な目標である。(エビデンス>地域に演劇力.pdf/2018年度逢坂小計画.pdf/地域に演劇力お届け事業実施詳細.pdf)

・□全体を通じて

大小織り交ぜて12の事業を、本助成金のもとに実施した。どの事業も、過去の実践を通じてのPDCAサイクルの構築により、ある程度練り上げられたものとなっており、一定水準以上の高いレベルで目的を達成できた。(エビデンス>2018/17年度アンケート集計.pdf)

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業期間について

新作公演では上演に向けて約二ヶ月、再演作品では短くても一ヶ月のリハーサルを行う。製作の準備は一年ほど前から少しずつ進めていく。この準備期間の長さ、費用・時間やエネルギーの投下に対して、上演回数がまだまだ少ない。もっと公演数＝観客の来場機会を増やすことで、観客動員を伸ばせる余地は十分にあると見込んでいる。

ただ、公演数を増やすことには課題もある。当劇場は鳥取市の中心市街地から30分程度、倉吉市からは40分程度の距離である。平日だけでなく休日も、夜の公演での集客が非常に困難である。平日昼間の公演も意外に集客することもあるが、やはり土日祝日の昼公演が主たる集客機会となる。

劇場としては、年間50しかない週末を多様な事業で埋めたいという思いもあり、特に子ども向けのワークショップなどは、週末でなければ行えない。そういう状況の中、どれだけ公演数を増やして動員数を積み上げていけるかは、いつも悩ましい課題である。

事業費について

俳優、演出家、スタッフ等への報酬も常に難しい課題である。当劇場のミッションは、地域コミュニティの中で、舞台芸術家が誇りを持って生活し、周囲からもその仕事を尊敬される状況を作ることである。時間をかけて作品づくりを行い、いわば24時間365日を舞台芸術家として生きている。誇りを持ちながら生活を支え、家族を支え、10年先、20年先の未来を見通すことのできる報酬を、劇場が支払うことができるのか。その見通しが立つのか。

地方コミュニティの中での劇場活動の継続は、限られた時間と資金の中で、劇場メンバーの熱意と工夫により支えられている。我々の劇場の現在は、事業費として計上できない多大な時間の積み上げによって成り立っている。

コミュニティの生き残りや発展と劇場活動の関係が意味あるものとして評価されるのであるなら、「費用対効果」という評価方法が安易に導入されないこと、あるいは「費用」と「効果」が広い視点で収集され、長い時間の継続も視野に入れた物差しとなることを願う。(エビデンス>決算2017-18/助成金補助金2017-18比較)

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

・□鳥の劇場の活動

鳥の劇場は、まずは演劇を創作する劇団としてある。2006年に芸術監督中島諒人が出身地鳥取に戻り、劇場として活動できる場所を探し、鳥取県鳥取市鹿野町の使われなくなった小学校体育館と幼稚園に出会った。東京でいっしょに活動していた俳優やスタッフが、地域の中での活動に興味を持ち移住してくれることで活動が本格化した。社会の中で演劇が尊敬され、劇場という場がコミュニティーの重要な拠点となることが、当初からの理想である。創作集団であることを中心にすえながら、地域のための様々な貢献を考え、提案し実践してきた。「演劇や劇場は地域の未来のために必要なものだ」と、多くの人に認識してもらうための挑戦を一貫して続けている。

組織はNPO法人（代表理事は中島）、メンバーは20名ほど。俳優、技術スタッフ、運営系のスタッフが、多様な仕事を兼務しながらフルタイムで活動している。

朝日新聞「地域の劇場をたどって・続」で活動が紹介された。活動の社会的意味を、記者の目で拾ってくれている。（エビデンス>劇場紹介.pdf）

・□施設と現在までの経緯

旧小学校体育館と旧幼稚園園舎を鳥取市との契約で借りている。幼稚園の遊戯室は収容数100名程度の上演空間としても使えるし、劇場（体育館）での上演時には開演までの時間を過ごしてもらうホワイエ（客待ち空間）となる。上演後は、このホワイエでアフタートークも行う。

体育館を改造した劇場がメイン上演空間で、間口約12メートル、奥行き12メートル、高さ8メートルの舞台を持つ。客席は35センチピッチで9列のひな壇になっている。最大で200名の収容ができる。

劇場（体育館）は、耐震強度に問題があり、老朽化もしていたので、16年に鳥取県と鳥取市が改修工事を行ってくれた。そもそもこの施設は、04年の鳥取市と鹿野町の合併時の取り決めでは、壊されて校庭も含む敷地全部が駐車場となる計画であった。その計画が撤回され、施設の改修に変更されたのは大きな出来事であった。

改修費用は七千万余。客席や舞台機構の設備は、行政はカバーしてくれないので、そこは当NPOが約一千万円で実施。寄付と金融機関からの融資で対応した。

民間団体の活動のために、行政からのこのような柔軟で踏み込んだ支援が可能になったのは、やはり地域と観客の理解、応援が大きな力となっている。（エビデンス>2018サポーター声.pptx）

・□役割 少しずつ劇場の存在が知られていく中で地方の文化拠点として以下の役割を担うことを意識して事業を企画、実施している。

- 1、地方なのだが先端の芸術の現場を
- 2、家族と一緒に、子供と一緒に楽しめるあたたかい場を
- 3、中国四国地方におけるオンリーワンの芸術拠点としての発展を
- 4、演劇公演を軸とした「1日の新しい楽しみ方」を立案し試行する

【創造性】

自己評価

・□公演事業の独創性、新規性、先導性

18年度の三つの公演事業は、どれも独創性、新規性、先導性を備えたものであったと自負している。

・『イワンのばか』はトルストイの寓話を元に、ダイナミック舞台装置を用いながら、力強い人間賛歌となった。(エビデンス>イワンのばか.pdf)

・『剣を鍛える話』は、2007年初演版を作り直した作品だが、シンプルな舞台セットを用い、演劇的な想像力の中で、多様なイメージを作る作品。本支援事業での上演後、韓国光州のアジア文化センターで上演し、たいへん好評だった。

・三島由紀夫近代能楽集4作連続上演は、まさに当劇場の真骨頂。短編で比較的取り組みやすい三島戯曲であるが、テーマは難解で象徴性が高く、俳優の高い技量も要求される。これを二週末に渡り、1日で2から3作品を順に上演(一週末で4演目を各二回)した。俳優とスタッフの実力とエネルギーがなければできない上演。評論家・菅孝行さん、社会学者・大澤真幸さんという論客に来ていただいたの三島由紀夫に関するトークも好評。全体として、鳥の劇場でしかできない知的で楽しく、にぎやかな企画となった。(エビデンス>三島公演1.pdf/三島公演2.pdf)

・□人材養成、普及啓発事業の独創性、新規性、先導性

常駐する俳優、スタッフが人材育成、普及啓発にも濃厚に関わることが当劇場の特徴である。「小鳥の学校」「高校演劇もっと盛り上げ事業」では、俳優数名が子ども達につきっきりで指導に関わる。見本を見せて真似させるとかではなく、彼らに考えさせて表現を促していく。技術スタッフによる指導も、技術面だけに終始し創作とつながらない形になってしまうことも多いようだが、当劇場では、「つくる」機能を活かして、創作と直結した実践的な指導となっている。(エビデンス>小鳥の学校CATV放映.pdf/1811小鳥.mp4/劇場で働く人たち.JPG)

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた(と認められる)か。

・□ステークホルダーは、劇場周辺の地域住民、鳥取市、倉吉市の市民、鳥取県民という風に距離的に広がっていく形でとらえる視点。観劇やその他事業への参加など機会や興味でとらえる視点。直接的には劇場活動に関わらないが、関心や応援の気持ちでの関わりの視点などを想定する。また、施設提供や補助金支給などによる行政、地域の商店や宿泊施設なども、ステークホルダーに含まれる。

以下、活動の継続によって「振興されてきた、盛り上げてきた」と感じられるものである。
観劇人口の広がり/演劇をやってみようという人の広がり/演劇を切り口とした他分野の芸術への興味の広がり(ダンスなど隣接分野や文学への興味など)/外国作家の上演を見てその国や文化への興味、関心、親近感/教育事業を通じての人材育成と保護者の演劇への理解/鳥取という地域への愛着や誇り

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

持続は、当劇場にとって最も重要な課題である。毎年度の資金の確保は当然であるが、長期的な視点で、人材育成、新規事業開発、海外とのネットワーク形成などを行なうことができた。18年度は、昨年度に比べて収支も改善した。

・□人材育成

・年間を通じての事業継続の中で若手のスタッフや俳優の育成を計画的に行い、実力の確実な育成を行うことができた。中堅の照明スタッフを静岡県舞台芸術センターに派遣できたことも、大きな成果であった。

・北海道教育大学とのつながりの中で、たいへん優れた学生をインターンとして派遣してもらった。当劇場の繁忙期を支えてもらいながら、劇場の仕事が地域の中でどれだけ意味のあることであるかを、肌感覚で体験してもらったこともできた。

・若手演劇人の研修機会を作れたことは、当劇場だけの人材育成にとどまらず、地域独自の多様な劇場文化が日本全国に育んでいくという長期的な目標の中で、非常に有意義であった。（エビデンス＞若手演劇人1.pdf／若手演劇人2.pdf）

・□新規事業開発

地域の課題やニーズに対して、演劇の知恵やノウハウを生かすことで新しい解を示し、地域の発展に貢献し、劇場運営の新しい資金とすることも考えている。

・アウトリーチで幼稚園や学校に出かけていくことは、そのための重要な情報収集の機会であり、それが本補助金により支えられているのはたいへんありがたい。

・ワークショップや創作体験の機会を提供し、体験型観光の場とすることに向けて、新しい動きを始めることができた。18年度は試行として、若い家族のワークショップを何組か受け入れた。

・地元のまちづくり協議会などと連携し、コミュニティー内の他の体験とも組み合わせつつ、「劇場のある小さな城下町」を国内外に売り出す方法の検討を始めた。

・□ネットワーク

・韓国の国立芸術大学・韓国芸術総合学校と人材育成に関する覚書を交わした。アジアの若い演劇人の学びの場として、当劇場が位置付けられることであり、たいへん名誉なことである。（エビデンス＞韓国芸術総合学校.pdf）

・中国の劇場への作品提供の話も始めることができた。定期的な公演による上演料収入の確保は、活動継続のために不可欠なことであり、二国間の相互理解を育む文化交流としても好ましいことである。

当劇場の事業は、設立から現在まで、一貫して構想・立案＞実践＞確認＞修正・向上・洗練の手順を踏みながら継続している（廃止したり全面改訂した事業もある）。限られた人材、資金、時間を最大限に生かすために当然のことである。事業の進行中、終了後に、劇場スタッフの間で課題や改善点を共有し、事業価値の最大化と機能強化につとめている。コンパクトな芸術家集団だからできる組織的強みである。